

末黒野

すぐろの

9月号 (通巻829号)



天牛

小川 玉泉

(名譽主宰)

梅雨の晴白き巨船の句碑寂びず
小糠雨老鶯声を惜しまざる
荒梅雨や郷社の石の大鳥居
庭先の芝にすつくとねじれ花
天牛をきゆうきゆう鳴かせ歳忘る
直りたる振子時計の音涼し

かみきり
天牛をきゆうきゆう鳴かせ感ふる

天牛は髪切虫のこと。
夏めいた昼下がり、娘夫婦が庭に作っている菜園を見に行つた。支柱に絡んで葉を広げた胡瓜に、つやつやした黒い羽根に白い斑点を持ち、二糰を超える触覚を左右に動かす昆虫がいた。何十年とお目に掛かつていない、ごまだらかみきりである。首と羽根の境を指先でつまんだ。すると、きゆうきゆうと高い音で鳴いた。しばらく童心に返つた。

梅雨

地に届かざれども弾む四葩かな
就中江戸系の白花菖蒲
溝埋めて十葉の白日は亭午
垂れこむる空の重さや栗の花

松本三千夫

一陣の城址の風や菖蒲園
若竹や扉朽ちたる石祠
凌霄や二階に干せる稚のもの
鰐口の布の太緒や梅雨じめり
白々と森の昏さを梅雨の蝶
どれも皆きのふの倍を今年竹
実桜や手話の弾むは恋ならん
塵出しの頭上掠めて梅雨鴉

滝

黒滝志麻子

(副主宰)

万緑に溶け入る鐘の余韻かな
滝ふたつ響きて山の音となる
川舟の灯を流しゆく夏始
白百合や回る少女のトウシューズ
日と風と入と夏めく根津の町
薔薇垣や窓の小さき女学院
禅寺の寂光に聞くほととぎす
絵団扇のピカソの目玉飛び出せり
貝風鈴下駄の音たて女の子
浴衣着の友の撫で肩藍にほふ
字を覚え初むる子の笑みさくらんぼ
水口に幣ひらめくや夏燕

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

蓮浮葉

森清堯

余花散るや峠の風のやはらかに
花は葉にとんと返信忘じをり
ながながと山裾へ貨車麦の秋
卓のワインと玻璃の若葉や森のカフェ
小満の夜明けをせかしはたた神
身の幅の磴の踊り場えごの花
まつさきに朝日を捉へ蓮浮葉
雨意きざす漁港の昼や夏つばめ
山帽子百の十字の翳の濃く
頂上や汗の手ふるる方位盤

オルゴール

森清信子

洋館の鉄扉の残り薔薇の園
オルゴール若葉の園の蚤の市
富士に向く籐椅子ふたつ美術館
家ごとの木橋石橋七変化
桑の実や厩舎よりたつ雀どち
切通し五月の小雨五月の香
アロハシャツ海軍カレー注文す
切り岸の底のせせらぎ岩煙草
遮断機の多き江ノ電夏つばめ
池の面へ雨の切つ先花ぎぼし



日の雫

安齋久英

羚羊のふり向き去りぬ木下闇
風涼しダム湖を分かっ橋の上
見え隠れせり林道の登山帽
谷川岳を仰寸月夜野露原し
緑蔭や縁起に耳を万たむげて
打水のアーテ零せる日の雫
採点の子に灯しやる蚊遣香
谷間の芯となりたり花空木
蓮池を満たす湧水音立てて
つくばひに影揺らしをり若楓

薔薇

石黒興平

洋館の灯りて暗し薔薇の園
薬見えぬほどの開きの薔薇が好き
新緑のさやぎや松の廊下跡
泥足を洗ふ早乙女薫束子
植田はや豊饒の風渡りをり
単線の伸びゆく植田明りかな
聳え立つダムの壁面夏の空
瑠璃色に鎮もる山湖朴の花
葉桜や日の斑の撫づる休み窯
髭剃つて梅雨の無聊を払ひたる

乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



鯉のぼり

吉田きみえ

雨上がり溪の鶯鳴きやまず
声高に過ぐ遠足の園児らよ
連れ立ちて海見る丘の薔薇の花
曾孫を抱きて見上ぐる鯉のぼり
銚杉の靄とけ朝の巢立鳥
紫陽花の青深みゆく古利かな
二軒目の店にてもとむ夏帽子

花摘み女

岡田史女

傘さしてたたんで栗の花の下
ほとばしる暗渠の水や未草
横須賀も奥なる里の花菖蒲
菖蒲田や笠を目深に花摘み女
師の好む菖蒲江戸系濃紫
とどまれば直鳴きくれぬ時鳥
蚊食鳥日暮れの風のがうがうと

牡丹

岡野里子

鐘楼を囲む百花の牡丹かな
青時雨馬留め残る閑所跡
影ろひて樹々彩増せり五月風
鯉跳ねて夏のにほひや汽水池
噴水の秀上ぐるみなと祭かな
細波の川六艇のカヌー来ぬ
初鯉すすめ上手に乗せられて

青炎集

松本三千夫選



横浜 河合とき

書に倦むやぬくめなほして一夜酒

照りかげる野や一叢の小判草

山鳩や梔子の花錆びはじめ

ガレージの屋根に青梅また一つ

花あふち人形塚の注連細き

葉桜や傘もささずに僧去りぬ

横浜 及川照子

曙の光とけゆく代田かな

黴の書に惹かれて一日神保町

さくらんぼ青春の香の喫茶店

雨意の風十薬の香の極まりぬ

マロニエの花と暮れゆく銀座かな

アキレス腱の美しき少女の素足かな

横浜 福永幸子

玉解いて風新しき芭蕉かな

雨音の明るき朝やゆすらうめ

廢屋を囲む十葉花あかり

太平記に紙魚を走らせ夫逝けり

いつまでも隣は空家花ざくろ

振花を残して芝生刈りにけり

横浜 川西栄江

重なりて雨滴の綺羅や若楓

源氏山の雀合戦夕薄暑

校門の虚子の墨蹟夏燕

今小路通りの隙や富貴草

オカリナを吹けば鳩来る青葉風

梅雨の星疎遠となりし母郷かな

横浜 大橋弘子

清水湧く水と光をからませて
山宿の日暮のしじま時鳥
泥んこもゐる学童の田植かな
植田風ななめに走る水の皺
庖丁にういらう粘る薄暑かな
応援の人文字描く夏帽子

横浜 皆川千佐恵

出来立ての夕餉彩るさくらんぼ
夏蝶の飛び来る堀の水澱む
紫陽花や寺をめぐりてひもすがら
新茶汲む家事の合間の至福かな
染みも又旅の思い出夏帽子
あめんばう水に潜らず水に棲み

横浜 磯部愛子

豆腐売り声を限りと春の夕
子等の荷とならずに生きむ夏来る
残りもの昼餉にさらひ梅雨に入る
朝刊をゆつくりと読む梅雨の午後
大輪の紫陽花瓶にカフェテリア
更衣散歩に出づる今日の晴れ

日野 中村月代

時鳥暗くや終日終夜
薔薇根付く優しき人に貰はれて
俯瞰する千の菖蒲や咲き揃ひ
麦秋てふ菖蒲の色は濃紫
梅雨夕焼切なきまでに燃ゆるかな
一瞬の刻を惜しむや梅雨の星

横浜 荒井貞子

老鶯や風やはらかき千枚田
雨蛙三つ指ついで墓の上
初生りのトマトの艶や日の匂ひ
草むしり気合ばかりの雨後の庭
雨戸繰るさんさんと日や夏至の朝
留守の間に厨を過ぎる蟻の列

東京 福田禎子

噴煙の止まぬ箱根や青時雨
川筋の多き町並花石榴
蔦青葉蔵の白壁画布として
移り来し終の住処やところ天
夏空やまはし干したる相撲部屋
睡蓮の眠りに着きぬ午後三時

耕 土 集

黒滝志麻子選



釣人の気怠き黙や夕薄暮

薫風や嬰の笑顔と隣合ふ

捨て上手は片付け上手更衣

片側に傾げ行き交ふ梅雨の傘

公園にオカリナの音梅雨晴間

町田 伴 秋草

柏 渕田 則子

二の腕を風の引き締む麦の秋
バスの床濡れて光りて梅雨に入る
膨らみの増すや日向の七変化
太陽が嬉しいと婆梅雨晴間
夏至の日の早起き昼のいや永し

花火舞ふ大空に舞ふ幻か

向日葵の見下す港賑はへり

万緑に苔むす屋根や見え隠れ

飼ひ主に似る蘭鑄や理髪店

娘夫婦みちのく巡る夏帽子

横浜 中村 高也

横浜 漆山 浩一

梅雨晴や旅の目当の磯料理

風炉手前舌に解けゆく和三盆

さよならの声掻き消すや青嵐

父の日や遺影の中の七十年

袋廻し西瓜の種を飛ばしつつ

相模原 内田 梢

相模原 板谷 俊武

影を追ふ園児等二列夏帽子
道碎くドリルの音や梅雨晴間
登校の子供に教へ夏至の朝
老鶯のけふも小節を誇りけり
谷戸の底しじまの底の菖蒲園

鎮魂の海甍り海鞘小鉢

屋顔の絡まる垣や通り雨

鮎の竿撓ふ川辺や菅の笠

仙人掌の花灰白き夕日影

帯高く駒下駄履いて浴衣の子